

市街地の浸水センサ ～流域治水の先進事例～

気候変動の影響から、排水能力を超える豪雨により市街地が浸水する内水氾濫が全国的に深刻になっています。従来の治水対策に加え、流域治水という考え方の下で被害を抑える対策が求められています。今回の市長対談では中央大学研究開発機構の山田正教授と、国土交通省三重河川国道事務所の時岡利和所長に流域治水の現状や最新のアイデアを取り入れた浸水の把握についてお話を伺いました。

市長 近年は気候変動により線状降水帯が発生するなど、浸水被害発生頻度が高くなってきています。山田教授は学術的観点から災害の現場をご覧になって、「流域治水」を強く提言されていますよね。

山田 この20年くらいの水害は内水で街が浸水した後、堤防が決壊してさらに氾濫がひどくなるというパターンが多いことに気がしました。従来型の河川管理者が行う治水だけでなく、地域レベルで洪水に対する守り方を考えていく流域治水が必要だと感じるようになりました。

市長 河川の流域全体を見ていかねばいけないということですね。国土交通省での取り組みはいかがでしょうか。

時岡 堤防整備や河道改修などの従来の取り組みに加え、流域の関係者で協力しながら総合的かつ多層的な対策を行っていくことを流域治水と呼び、国の政策として進めています。

市長 雲出川では、平成26年度に「河川整備計画」が作られました。下流部から堤防整備や河道掘削などが国土強靱化予算により飛躍的に進み、中流部整備に差し掛かったタイミングで流域治水関連法が改正されました。令和5年3月には雲出川中流部を流れる波瀬川、赤川などを「特定都市河川」に指定していただき、河川の整備を進めながら、流域全体で治水を図っていくという考え方が進みつつあります。

時岡 雲出川中流部の特徴的なところとして、いわゆる無堤箇所と呼ばれる箇所があります。歴史的に、一旦洪水を田畑の方へ逃がして市街地を守るといった先人の知恵という側面もあるのです。このような場所では、ハード整備だけでなく既存の遊水機能の確保と堤防整備などをバランスをとって組み合わせ、合理的に被害軽減を実現してい

くことが重要です。このような流域全体での取り組みを進めていきたいと考えています。

市長 そのためには、流域全体の住民の理解が必要なわけですね。

山田 流域治水は利益と利益がぶつかり合う世界でもあります。田んぼダムがいいんじゃないかと流行り言葉のように言いますが、農家の方にとって貴重な生産の場が荒らされるわけですから。それをどう過大な負担にならないように調整し合うか、調整役のような方が地域にいてくださらないとうまくいきません。

時岡 例えば計画遊水地は、地域の皆さまに相談し、一定の金額をお支払いをしながら、営農を続けていただくといった対策も考えています。

山田 洪水からの守り方には3通りあると思います。堤防等で抑え込めってしまう考え方と、危険な場所には

未来の
変化を
正確に
予測し
気候
変動
への
対策
を講
じる。

国土交通省
三重河川国道事務所長
時岡利和
TOKIOKA TOSHIKAZU



中央大学
研究開発機構教授
山田正
YAMADA TADASHI



流域治水は総合学問。
各分野が集結し、
災害に強い地域に。